ラドヤード・キプリング

2　東と西のバラッド

ああ　東は東　西は西　互いに睦み合うことはあるまい
天と地がともに最後の審判の場に立つその日までは
だが　東も西も国境も血筋も生まれもあるまい
対極から来た猛き丈夫二人　相見えるそのときは

カマルは二十人の手下をしたがえ　国境で戦をしかけた　5
敵の連隊長閣下自慢の赤毛の雌馬をかっぱらい
白々と夜が明けるころ　厩の戸口から堂々と盗み出したのである
蹄鉄を後ろ前逆向きに打ちなおし　追手をまいてずらかった
国境警備隊を統べる閣下の息子が大音声を張り上げた
「誰かカマル奴の潜むところを知らぬか」　10
現地徴用の騎兵連隊の長の息子ムハメド・カーンが答えた
「朝霧の登り行く道が見えれば　奴らの居場所が分かりまさあ
奴らは日暮にゃアバザイを侵し　夜が明けりゃボネアに攻め入るつもり
でも己のねぐらに帰るにはブクローの砦を通らにゃなるまい
翔ぶ鳥のごとく速く砦まで馬を飛ばせば　15
運がよけりゃジャガイの峠に着く前に追いつけよう
だがもし奴がジャガイの峠を通過した後だったら　引き返すべきでしょうな
広い平地はカマルの一族に埋め尽くされて身の毛もよだつ
左に岩山　右に岩山　その間は痩せこけた茨ばかりの荒れ地
射手も見えないのに　カチリと撃鉄を起こす音がしまさあ」　20
連隊長の息子は愛馬にまたがる　手に負えない栗毛の暴れ馬
いななく声は乱れ鐘　心の臓は地獄の冷徹　首はさながら鋼の絞首台
かくて息子は砦に至り　腹ごしらえをと勧められる
だが賊を追う身　ぐずぐずしてはおれぬと
すぐにブクローの砦を発ち　先を急いだ　25
ついに息子はジャガイの峠の隘路に父の愛馬を見つけた
しかも何ということ　カマル奴を乗せた父の愛馬を
息子はその白目の見えるところまで近づいて短銃をぶっ放した
一発　続けてもう一発発射した　ヒューッとばかり弾は空を切った
「一丁前にやるじゃねえか」とカマル　「手綱さばきはどうだ」　30

ジャガイの峠を越えて駆けてゆく様は砂塵の竜巻のごとく
息子の栗毛は逞しい牡鹿さながら　かたやカマルの赤毛は若い牝鹿さながら
栗毛ははみに抗い　頭を高く振り上げ
赤毛は轡(くつわ)を鳴らし　乙女が手袋もて遊ぶ風情(ふぜい)
左に岩山　右に岩山　その間は痩せこけた茨ばかりの荒れ地　35
射手(てき)も見えないのに　三度カチリと撃鉄(ボルト)を起こす音がした
二人は山の端に月が沈むまで競い　ひずめの音は白々と夜が明けるまであたりに轟いた
栗毛は手負いの牡牛のよう　かたや赤毛は目覚めたばかりの小鹿のよう
栗毛は水路に落ちた　人馬もろともざぶんと落ちた
カマルは赤毛の向きを変え引き返し　息子を引き上げ　40
その手から短銃を叩き落した　もはや勝負は決したのだった
「わしの情けと思え」とカマル　「よくぞここまで死なずに馬を駆ったものだ
この広い荒れ地には石ころひとつとてなく　木立らしきものもない
だがわしの手下どもがそれぞれライフルをかまえて潜んでいる
もしわしが手綱取る手をちょいと上にあげたら　45
敏捷な手下(ジャッカル)どもが群がって　お前をむさぼっていただろうて
もしわしがこの頭を胸元に下げたら
頭上のトビが　もう飛べないくらいお前の肉を腹に詰め込んでいただろうて」
連隊長の息子は軽やかに答えた　「鳥獣(とりけだもの)にくれてやればよい
だが貴様が祝宴を挙げる前に俺の部下が邪魔だてに来るぞ　50
万が一抜き身をかざしたわが戦友千人が俺の骨を持ち去ろうとやって来れば
貴様の手下(ジャッカル)の餌代は　盗人(ぬすっと)ごときが払いきれるものじゃないだろう
友軍は馬に刈り入れた穀物を食わせ　兵隊は蓄えた穀物を食らい
倉庫のわら屋根は屠った牛を焼く燃料にされるだろう
貴様がそんな目にあってもかまわぬならば　宴(うたげ)をはるがよい　55
犬はジャッカルの親類だ　犬め吠えろ　仲間を呼べ
屠られた牛 むざむざ軍馬に食われる青麦を損だと思うなら
親父の愛馬を返せ　改めて一対一の決闘だ」
カマルは息子の手をにぎり　立たせてやった
「手下どもは関係ねえ」とカマル　「わしらはいうなれば狼と灰色狼　60
わしがお前を倒したとて　このわしもただでは済むまい
貴様様はいかなる軍(いくさ)の女神の申し子か　大胆不敵な戯言(ざれごと)よ」
連隊長の息子は軽やかに言った　「一門(クラン)の血にかけて
赤毛は父のからの贈物として貴様に進ぜよう　男の中の男を乗せた馬」
赤毛は連隊長の息子のもとに駆け寄り　その胸に鼻づらをすりよせた　65
「われら共に猛きもの　だが馬は若いのが良いと見える
ならば連れていけ　わしからの贈り物としてトルコ石をちりばめた手綱と
飾りのついた鞍と覆い(カバー)　銀の鐙(あぶみ)もつけよう」

息子は短銃を取り　銃口のほうを握りカマルに手渡した「貴様は先に俺から一丁奪った
「今友となりたる俺からもう一丁受け取ってくれ」　70
「贈り物には贈り物」すぐにカマル　「身内には身内」
お前の父親は俺のところへ息子を寄こした　俺も息子を寄こそう」
そう言うやカマルは一人息子を口笛で呼んだ　息子は山から駆け下りてきた
若い牡鹿のごとく茨を踏みしだいてやってきた　天晴れ若武者の立ち姿
「このお方がお前のお頭(かしら)だ」とカマル　「国境警備隊(ガーツ)の隊長をしておられる　75
このお方の左側を盾のようにお守りするのだぞ
陣中　食事中　就寝中いかなる時も命をかけて守れ　死が親子の絆を絶つまで
お前の命はこのお方に預ける　お前の運命(さだめ)は鋭意この人をお守りすることだ
お前は大英帝国女王陛下の禄を食(は)まねばならぬ　陛下の敵はお前の敵だ
国境の平和維持のため わしの領土を荒らしまくれ　80
騎兵たちを鍛え上げ　大物に出世するんだ
わしがペルシャヴァールで縛り首になるとき　お前は現地徴用部隊の英雄になれ

二人は互いの眼(まなこ)をみつめあった　そこには微塵(みじん)の偽りもなかった
種入りパンと塩の儀式で兄弟の契りを結んだのだ
聖なる火と切り取った芝の儀式で兄弟の契りを誓ったのだ　85
軍刀(カイバー)の柄と鞘にかけ　アラーの神にかけて誓ったのだ
連隊長の息子は赤毛に　カマルの息子は栗毛にうちまたがり
往(い)きは独(ひとり)なるも複(かえ)りは連れ立ち　ブクローの砦にたどり着く
兵営に近づくや　二十の白刃が出迎えた
カマル一族に恨みを抱かぬものは誰一人いなかったからだ　90
「事は終わった　事は終わった」と連隊長の息子　「剣を収めろ
昨日(きのう)の敵はなんとやら　今日からこの若者は我ら警備隊の仲間」

ああ　東は東　西は西　互いに睦み合うことはあるまい
天と地がともに最後の審判の場に立つその日までは
だが　東も西も国境も血筋も生まれもあるまい　95
対極から来た猛(たけ)き丈夫(ますらお)二人(あいまみ)　相見えるそのときは

（桝井幹生訳）